



『動物福祉の科学 —理念・評価・実践』

佐藤衆介・加隈良枝 監訳

2017年5月
緑書房 発行
405頁
定価（本体 8,250円＋税）

高野翔太・浅川満彦

（酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC）

コロナ禍で目立たなかったが、2021年盛夏、元農林水産大臣に収賄罪の求刑をされた。鶏卵産業におけるアニマルウェルフェア（以下、AW）の国際基準に対し、反対意見をとりまとめ、日本での導入を免れようとした同産業界から多額の賄賂を受けたという。この基準を遵守することに伴うコストを考えると、業界は死活問題となろうが、いずれにせよ、AWが関わった事案として関心をお持ちになった会員も多いと思う。

それとも、学生会員の多くは、家畜・家禽のことなど、関係は無いと切り捨てているのだろうか。確かに、AWの科学はこういった産業あるいは伴侶動物で発展したが、その知見は動物園の飼育動物にも応用されている事例が散見される。たとえば、AWを評価する実践例として（本書第12章）、米国内の動物園が連携したウンピョウの福祉改善の事例は貴重である。ひょっとしたら、本拙稿をお読みの方で、卒論研究として糞便中グルココルチコイド濃度を測定している学生諸君もいるだろう。その研究がどのような意義を有し、改善のための過程でのような位置付けにあるかを本音で知ることになる。

残念ながら、本書を通し free-ranging の野生動物に関して取り上げた事例はほぼ無かった。浅川（2021）が法獣医学の側面で、虐待などの参考にしたと思い、本書を入手したのだが残念であった。しかし、将来、動物園獣医師を目指す私（浅川）のゼミ生はきちんと読み込んでくれた。以下に、彼による概要紹介を示す。

なお、ここではAWを「動物福祉」と同義という前提で展開をしたが、両語はやや異なるという。この点については、本書監訳者の一人が上梓された書籍〔その書籍紹介は浅川（2006）〕を参考にして欲しい。また、本書第15章「ヒトの接触」は、事実上、人と動物の関係科学と密接に関わるので、金谷・浅川（2015）で紹介した書籍もあわせて読み込んで欲しい。（文責 浅川）

本書は計19章で構成され、そこからさらに論点（第1, 2章）、問題点（第3章から第7章）、評価（第8章から第12章）、解決策（第13章から第16章）、実行（第17章から第19章）について大きく5つのパート構成に分けられた。

パート1の論点では動物倫理について考えることの必要性や理解をより深めるために、倫理的考察や動物倫理の歴史、科学的概論が記載されていた。動物倫理に対する理論的見解には必ず複数の価値観、思想が複雑に絡み合うため、一つの見解に固執するのではなく様々な焦点から動物倫理について考えることが必要だと感じた。また動物倫理に対する複数の思想の概要が記載されていたため、自分の倫理観の偏りの確認やより柔軟な思考を持つために動物倫理の理論的知識をより深めることができるパートであると感じた。

パート2の問題点では第3章で環境が動物に与える刺激の様々な面について取り上げながら動物の主体性と潜在能力について関連付け記載しており、第4章以降では動物福祉を妨げる要因やそれに対する課題について、動物福祉の推奨事項として多くの規約に取り入れられている「5つの自由」に触れながら記載されていた（ただし不快に関する記載はなし）。痛みのように疼痛評価の難しいもの、恐怖のように定義が多く複雑な情動についてもそれぞれ認知と感覚・情動との関連について説明がされた後に、今後の対策について記載があった。動物にとって望ましくない情動状態は削減しなければならぬが、限られた刺激に対する特定の反応のみを操作しても実際の価値はあまりなく、根源にある原因を調べる必要があると感じた。

パート3の評価では動物福祉の様々な評価方法について記載があった。福祉は単純で単一の指標ではないため以前の章で記載のあった概要に関連して評価することが必要であり、その関連する問題を考えることにより評価できるとあった。また、第12章では前述の動物福祉の評価および改善のための実践的戦略について既存の評価法に触れながら述べていた。例として挙げられた産業動物、動物園動物だけでなく実験動物にも適応した多角的な福祉モニタリングを可能とするために、種の飼育のための定期的に更新されるガイドライン、認定基準、長期的で学際的な多施設研究、および連続的な福祉モニタリングのための迅速評価手法が必要となるだろう。

パート4の解決策ではこれまでの問題について福祉向上を目指した物理環境、社会環境、ヒトとの相互作用、遺伝的改良の可能性について記載があった。ヒトと動物の関係の発達におけるヒトの重要な役割と責任を例証し、動物福祉を保護するためにヒト

と動物の関係を向上させることが必要であることを示すパートとなった。

パート5の実行では解決法を実行に移す方法について記載があった。第17章では動物福祉に関する政策決定と経済学との関わりについて動物利用のコストと利益に着目しながら検討していた。また動物福祉について述べるだけでなく経済的分析のための経済学的な枠組み、手法、それらが政策に与える影響の評価も併せて記載されていた。経済を考慮することは、倫理、獣医学、その他の分野とともに動物福祉の中心でありこれからの研究、向上に不可欠であると感じた。第18、19章では国際レベルで動物福祉に関する法律を制定されてきたことを示し、多くの国において人道的に動物を扱うことが動物と人間双方にとって有益であることを述べていた。しかし動物の輸送と食糧生産のための屠畜を含む殺処分は圧倒的に多いとあり、動物福祉を配慮する際に倫理的観点より経済的利点の方が優先されていることがわかり、動物福祉に関する解決すべき課題はまだ残っていると感じた。

本書は世界中で関心が高まっている動物福祉について、科学的な研究だけでなく動物に関わる様々な分野の評価から現在の直面している問題に対する解決方法の実践まで、日本国内だけでなく、世界中の近年の研究結果をもとに動物福祉の現状をまとめ、動物福祉の在り方を理解するために役立つ。

私（高野）のような動物福祉について、ある程度、その概要や定義のみを生半可に理解している者にとって倫理的側面だけではなく、科学的、経済学的側面に留まらず多くの観点からより動物福祉について再考させられ、動物福祉は多くの事象が絡み合って成立する動物と関わるうえで欠かせない学問と受け取ることができた。

（文責 高野）

引用文献

- 浅川満彦. 2006. 書評『アニマルウエルフェア—動物の幸せについての科学と倫理』. 生物科学 57: 116.
- 浅川満彦. 2021. 野生動物の法獣医学. 地人書館, 東京. (印刷中)
- 金谷麻里杏, 浅川満彦. 2015. 書籍紹介『人間動物関係論 - 多様な生命が共生する社会へ』. *Zoo and Wildlife News* (日本野生動物医学会) (41): 30-31.